

2024年（令和6年）2月16日

意見陳述書

住所：福島県浪江町大字下津島字原 87

菅野みずえ

1. 福島原発事故前の暮らし

原発事故当時福島県浪江町下津島で夫、息子、犬の3人と1匹で暮らしていました。仕事は大熊町包括支援センターで非常勤の社会福祉士として働いていました。

浪江町の下津島地区は500人ほどの小さな集落で、冬タイヤを11月の初めに履き替え5月の連休で外す暮らしで、雪は年が明けて降り始め、4月桜の花に雪が積もる年もありました。気温はほぼ毎日氷点下でした。雪の日は子どもが居なくても、子どもたちの登校までに隣の家までの雪かきをして通学路を作る、子どもは地域の宝としてみんなで大切に暮らしていました。長い冬を助け合って暮らす、穏やかな町で、四季折々に行事があり大人も子どもも一緒に取り組む町でした。此処に水道設備はなく潤沢な山からの引水を使っていました。

2. 2011年3月11日 —やっとのことで自宅まで帰る—

2011年3月11日地震が起こった時は職場で勤務中でした。支援センターでは精神疾患の方のデイケアが行われていました。大きな横揺れが始まり、いつ収まるとも分からない揺れで、天井に設置されていたエアコンが次々と落ちてきてコードだけでぶら下がり地震の揺れでまるでブランコのように規則正しく揺れているさまは恐ろしいものでした。

揺れが収まった時にデイケアの方々を外へ誘導し、利用者の皆さんが通りの屋根から瓦がずり落ち、通る車に直撃する姿などを見せないように通りを背にして輪になって手をつないでいました。地面が足元から地割れしていき、雷が鳴って吹雪になりましたが、地震は繰り返し続いていました。揺れが収まった間にみんなの上着や荷物、車いすなどを外へ職員が取りに戻る状態が続きました。

その間にも職員は一人暮らしの老人の安否確認に出かけていましたが、津波で集会所が持って

行かれた、信号が全て止まっているが 6 号線も津波で動けなくなっている。駅の陸橋が地震で倒壊し通れなくなっている等の情報もたらされていました。電話もつながらなくなり、個人の携帯電話もほとんどつながらなくなっていました。

5 時に非常勤職員は帰宅命令が出て、常勤職員は待機となりました。

家まで 45 分の道のりでしたが、帰宅路がため池の橋が崩落し、通行止めとなり、6 号線も津波で通行止め。288 号線を葛尾村方面に迂回しました。6 号線に抜けようとする車が数珠つなぎになり、地面が割れて車が落ち込んでいくのを助けようもありませんでした。6 号線が通れなくて U ターンすることになるのですが、回転する場所も無く立ち往生になっていました。

288 号線は避難路でしたが、大きな石が防護ネットを越えて落ちていました。電柱が傾きは、たわんだ電線が道に揺れていました。余震のたびに電線が大きく揺れ、石も山から落ちてくるのをよけながら必死で運転していました。でも 288 号線から葛尾村への道は学校の土留めが崩落し道を塞いで通行止めで引き返しました。

浪江町へ帰るといふ工事車両 2 台に前後に挟んでもらって、津島へ抜けていく峠道を、地震で雪崩れた雪の斜面を斜めになりながら、さらには、道の真ん中が私の身幅ぐらい大きく稲妻状に割れた所を左右のタイヤの間に挟む形で、蛇行しながら降りていき、やっと浪江の山間部の津島に帰り着きました。家のそばにある親戚の老夫婦の家に行って安否確認をしたのが、20 時半くらいで 3 時間半かかっていました。

3. 3 月 12 日から 14 日 一自宅に次々と避難の人々外一

3 月 12 日の朝になると、原発で働く人から原発は危ないと知らされた町は、「町内の一番山側にある津島（浪江町の支所がある。）に、全町が避難するように」という避難命令を出しましたので、近隣の建物という建物に人が避難して来ました。私の友人や親戚も私の家にどんどん集まってきた、朝から夕方までの間に、私と息子を含めると、27 人になりました。

その夕方に家の前に 1 台のハイエースのような車が停まって中から何か言っているのですが、見たこともない防護マスクに全身白い防護服で、聞き取れなくて窓を叩いて分からないと伝えると、「な

んでこんなところに居るんだ、ここは危ない。30 キロを超えて逃げてくれ、頼む！！此処は危ない！！頼む！！逃げてくれ！！」と叫ぶように泣くように訴えるのです。ここは避難場所になっている。と保育園公民館など3カ所を指さすと、彼らは車から降りてきて、通りを歩いている人にも呼びかけ、避難場所を目指して走っていきました。

そのことを我が家に避難してきた人たちに伝え 13 日の昼までには皆さんがより遠くへと避難していかれました。息子とわたしは炊き出しのために町が全町避難を決めるまで残ると決めました。

その男たちが何処の誰なのか確かめなかったために浪江支所に連絡しても受け付けてもらえませんでした。当然です。原発事故が起きていると、国からも県からも、協定を結んでいた東電からも何の連絡も来ていなかったのです。

福島県浜通りは全ての工場は止まっており、人の立てる物音全てが無くなったところに 14 日の大きな爆発音が響き渡りました。この世の終わりだと思いました。テレビをつけると画面が切り替わり、津波です！避難してください！の呼びかけと、津波が来るとは思えない海の水面だけが映し出され、気象庁が津波の情報は確認していないの声も画面も消されてしまいました。この時東京にいた友人は原発が爆発する映像を見ていたそうです。原発が爆発する前に、立地の町の皆さんは全町避難で政府が差し向けた避難バスでより遠くへと逃げていたのに、福島第一原発から僅か 6 km しか離れていない浪江町は何処からも連絡の無いまま、スピーディーが教えていた濃い放射性プルームの流れるところに留まっていたのでした。

避難計画では、事故を起こした発電所は直ちに立地市町、府県、国へと連絡し、国県は直ちに周辺市町村に知らせることになっています。浪江町は東電と何かあったら直ちに知らせると協定を結んでいました。しかし、其の何処からも浪江町に連絡は無かったのです。県からも国からも、我が町の 21500 人は棄てられたのだとわたしは思っています。

4. 全町避難 ―スクリーニング検査で針がふりきれー

爆発音を聞いた町は、21500 人を受け入れてくれるところを必死で探し、夜中に二本松市から受け入れると返事をもらい、翌 15 日朝 8 時に、10 時までに二本松市に向けて全町避難すると

町民に知らせました。

我が家は全町避難となったら夫の勤め先のある大阪府に向かって逃げようと決めていました。チェルノブイリの子どもたちを公民館活動で保養に受け入れていた町でしたから、原発が爆発したらどんなことになるのか、チェルノブイリの人からも話を聞いて解っていました。二度と家に帰れないと思い、家にある食べ物全てを畑に撒きました。農家ですから春からの種に採ってあるものすべて外に出しました。動物の餌になればと思いました。持ったのは町の花のコスモスの種だけ。空き地があればどこかで種を蒔いてまた種が取れると思いました。冷蔵庫の掃除をして、お位牌と仏壇の社を取り外し、耕運機からガソリンを抜き燃費の良い軽自動車に入れ、二度と家の米は食べられなくなると、米袋を積めるだけ積むと場所がなく、買えるものは残せ、どうしても要るものだけと息子に言われ、喪服と、当座の着替えだけ持って家を出ました。雨が雪に変わっていました。

ラジオで、避難するときはスクリーニングを受け、スクリーニング証明書がないと避難を受けつけてもらえないと呼びかけており、郡山総合体育館を目指しました。息子が駐車場を探し、わたしは順番の列に並びました。地震で体育館も壊れており、中へは一部しか入れず 3 時間並んでようやく順番が来ました。並んでいる間も、男の人が胸を押さえてうずくまって倒れる人、嘔吐する人たちがいました。そして「また津島～！！」と叫ぶ声が響いていました。

私の順番が来ました。頭部を測定するとガイガーカウンターの針がパタンと振り切れました（100,000cpm 超え）。え？と係の人が言い、肩、掌を測定するとまたパタンと針が振り切れて、故障していませんか？と聞きました。何処から来た？と問われて、下津島と答えると、係の人が遠くに向かって「また津島～！」と叫び、ああ、こうやって振り切れる人は津島から来た人なのかと思いました。奥から分厚いビニール袋が持ってこられて、上着を脱いでこれに入れ、1 週間開けないように、8 日目に洗って良いと言われました。上着の下、ズボンは 8 のところで止まりました。心配した息子は全て 8 のところ辺りで針が止まりました。わたしについては、本来髪を洗いシャワーを浴びてもらうが、断水しており、ここでは不可能なのでどこかで必ず速やかに髪を洗うよう言われ、行って良しとスクリーニング証明書を受け取りましたが、数字は書かれていませんでした。

原発事故が起こった時スクリーニングの上限は 13,000cpm であり、それを越えたら鼻スミアを受

け、ホールボディカウンターを受けなければならないはずでした。しかし、それを振り切れる人が続出し、14日から上限を100,000cpmに引き上げられていたことを後で知ります。この時、鼻スミアもホールボディカウンターも受けることはありませんでしたし、体表面1cm辺り10万本の放射線の矢が出ていることなど、全く分かっていませんでした。

事故調の聞き取り調査の中で、13,000cpmで福島県が回っておらず、サーベーター上限100,000cpmはどれくらい被ばくしたかそれ以上分からないが、振り切れる人は居ないだろう、その後の病気等についても心配はないだろうと福島県が引き上げたと書かれています。10万以上になってもふき取る、上着を脱がせる等でそれ以下になれば通行証を出すということになったと調査で書かれていました。其処には現場が対応しきれなく、放射線被ばくについて全く理解のない人々が振り回されていた結果だと分ります。

わたしが受けた15日の福島県の記録では県内で100,000cpmを振り切れて人は5人となっています。でもあの時また津島～という声は沢山聞きました。福島県に問い合わせても、わたしが受けたスクリーニング場所の記録は8日間見つからないと言われました。混乱の中で記録が採られてなかったと。しかし、公務員の仕事の中で記録を取らないことはあり得ないと知っています。混乱時であるときほど、正確な記録を残さねばならないとわたしはそれまでの仕事の中で知っています。ありえない返事だと思っています。

ガソリンがなく高速道路には不安で乗れず、地道を関西に向かって地道を走りました。何処のガソリンスタンドでも福島から来たと分ると給油を断られ、夜が明けて長野県に入ってガソリンスタンドのシャッターが開くところで、お願いすると満タンで良いかと聞かれました。満タンにしてもらえますかと聞くわたしに、ガソリンスタンドだよと答えてもらった時、本当に安堵しました。ようやく高速道路に乗れ、ガソリンをもって走って迎えに来てくれていた夫と弟に連絡がついて、サービスエリアに入ると、其処は全く普通の世界で、わたしたちの不安とあの日々は何だったのかと別世界に迷い込んだ気がしました。

5. 大阪に避難したのち —友人から面会拒否されたことなど—

大阪に到着し、心配して逃げるようにメールを送ってくれていた知り合いに避難してきたことと心配してもらったことのお礼を言いを訪ねた時、会ってもらえず、インターホン越しにあなたたちが逃げてくるから高速道路を伝って全国に放射能が振りまかれたと言われました。福島はどこかへ逃げろと言うことだったのだ、わたしは腐った蜜柑だと思いました。ちょうどその時、避難所の運営で疲れ果てた浪江の地元の友人から、帰ってきて！避難所が大変なことになっている、手伝ってと電話が来ました。居場所があると救われました。わたしは福島へ戻るから、息子だけこの街に避難することを許してほしいと伝え、二本松の東和体育館へまた軽自動車に山用のシュラフを持って戻りました。

4月の終わり頃いつまでも居られると市民生活の支障になると、二本松市民からの苦情があり、県が二次避難所を温泉旅館などに開設し、わたしは安達太良体育館へ行くよう振り当てられていたのですが、其処に行くと名前がなく、問い合わせでも混乱の中、同じ苗字が多い町で、探し当てられず、またとぼとぼと大阪に向かいました。1か月後犬も連れて暮らせる仮設住宅を桑折町が浪江町住民を対象として作ってくださり、2011年6月1日大阪で暮らしにくいという息子と、犬と仮設住宅に入居でき、5年暮らしました。

6. 浪江町帰還困難になって思うこと

その頃我が家は帰還困難区域となっており、国の説明会で、いつ還れるのかと問う住民に、私見ながらと断って、担当者が35年は無理かと思うという返答があり、生きている間は還れないと、避難場所を探さなければと家族で話し合いました。浪江の暮らしの続きをしなければ悔しい、自分たちの野菜は自分たちで作る暮らし、地域の中で生きる暮らしと話し合い、いくつかの場所で古い農家を探しました。あるのは原発から50km圏内でやっと現在の地に避難場所を見つけました。地域コミュニティにも入れていただきました。でも、この苦労はしなくても良かった苦労だと思っています。

浪江町も珠洲市も住民が原発を作らせなかったところです。もし此処に原発が出来ていたなら、浪江の予定地はあの津波でひどい被害を受けた場所です。珠洲市の予定地は、活断層はないと言われていたのに今回の地震で壊滅的な被害を受けた場所です。此処に原発が出来ていたなら大変な被害をもたらしていたでしょう。原発に反対した人々は、賛成する人の子や孫の命と健

康まで護ったのです。電力会社の原発で働く人の子や孫の命と健康を護ったのです。この国の国土と経済をも護ったのだと思います。

こんな地震大国に原発は作ってはならないと、被害者となって家から町から追われ、仕事も家も農地も汚染されて、親戚や友達とも離れ離れになり、馴染みの味馴染みの店も失ってに染みて思っています。

どんなに経済的な電力、二酸化炭素排出減量と言われても、核のゴミは永遠に残り増え続けるのです。それは許されることなのでしょうか。

そもそも避難計画が必要な電力供給は安全などと言えるのでしょうか。その避難計画もわたしの避難からしても、今回の能登地震についても、避難路は避難路足りませんでした。電力供給のために、何十万という人々が健康を脅かされ、家から追われることが経済のためには許されることなのでしょうか。100,000cpm のガイガーカウンターの針が振り切れた私は、2015 年 3 月に福島で受けた健診で甲状腺に何の問題もないと言われましたが 2016 年 2 月に受けた避難者健診で甲状腺に異常が見つかり、専門病院で 3 月中に手術をしなければならない、放っておけない癌と診断され、受けた手術でリンパ節に転移している癌と分かりました。今残った右甲状腺が癌にならないよう服薬で甲状腺機能低下症になっています。

ほかの人にこんな苦労はしてほしくないと思います。何の役にも立たない苦労ですから。それで原告になりました。この地震大国に原発はふさわしい電力供給ではないと、思い知らされた私たちが言わなくてはなりません。